



# 森のちやれんがニュース

## 2020 冬

北海道博物館  
HOKKAIDO MUSEUM

Newsletter vol.22



### 文化の日特別イベント

#### ヴォーカルグループ MAREWREW (マレウレウ) によるアイヌ音楽ライブ

MAREWREW (マレウレウ) は、アイヌの伝統歌「ウポボ」の再生と伝承をテーマに活動する女性ヴォーカルグループ。MAREWREWによるアイヌ音楽ライブは、2015年の北海道博物館オープンの年から毎年開催し、今年で6回目となりました。新型コロナウイルス感染対策のため、80人の定員をもうけ事前申込制としたことで、例年のように多くのお客さんとともに盛り上がるライブというより、落ち着いて楽しむ音楽会のような雰囲気でのびやかになりました。また今回は、MAREWREWのライブなども手がけた経験のある菅原謙さん(旭川市)を音響スタッフに迎え、アイヌ音楽の魅力のひとつである声の複雑な重なりや、ムックリ(アイヌの楽器のひとつである口琴)のデリケー

トな響きが、スピーカーを通してくつきりと客席に届くよう調整していただいたので、MAREWREWの世界を今までより一層楽しんでもらえたのではないかと思います。

過去の音源から再現し、さらに発展させたMAREWREWの音楽。樺太や旭川など、さまざまな地域で伝承されてきた音楽を体験できました。

(学芸員 渋谷美月)



### CONTENTS

- ② 収蔵資料紹介  
白亜紀の海生爬虫類の歯
- ③ 博物館事業紹介  
北海道開拓の村 建物の大規模改修工事について
- ④ 研究活動紹介  
リンゴ農家の農具の収集と展示、その後  
—「掛け袋(左袋)」を探して—
- ⑥ はっけん広場 冬の活動報告  
お持ち帰りキット「きょうりゅう FAN FUN FAN」  
アイヌ民族文化研究センターだより  
アイヌ文化巡回展「アイヌ語地名と木田金次郎」を開催しました
- ⑦ 2020年度博物館実習について
- ⑧ 活動ダイアリー  
2020年9月～2020年11月の記録

## 収蔵資料紹介

# は 白亜紀の海生爬虫類の歯

添田 雄二

研究部自然研究グループ 学芸主査

私が当館に就職した1997年8月(当時「北海道開拓記念館」でしたが)、ちょうど第44回特別展「化石にみる世界の海—クビナガリュウからステラーカイギュウ—」が開催されていました。今回紹介する写真の化石は、この特別展では「モササウルスの歯」として展示されていましたが、近年、海生爬虫類化石の研究が専門である佐藤たまき氏(東京学芸大学准教授)によって再検討が進められています。

モササウルスという名前からは、恐竜の姿を想像するかもしれませんが、恐竜ではありません。恐竜が生きていた時代(三畳紀・ジュラ紀・白亜紀か

らなる中生代という時代)の海には、様々な大型の爬虫類が棲んでいました。北海道には白亜紀後期の海で堆積した地層が多く分布しており、そこからアンモナイトとともにモササウルスや首長竜、ウミガメなどの爬虫類の化石が発見されています。

モササウルスは手足が<sup>ひれ</sup>鱗になったトカゲの仲間で、北海道では三笠市からタニファサウルス(エゾミカサリュウ)、むかわ町ではフォスフォロサウルスなどの化石が見つかっています。首長竜には2つのタイプがあり、一つは首がとても長いタイプで、もう一つは首が短いタイプです。北海道では首の長いタ

イプ(エラスモサウルス類)の化石が多く発見されており、中川町や小平町、むかわ町では実物大の全身復元骨格模型が展示されています。このうち、中川町のものは特に大きく、全長は11mにもなります。一方、首の短いタイプは北海道ではまだ数例しかありません。

この化石が展示された1997年当時は、北海道で発見される海生爬虫類化石についての情報がまだ少なかったため、様々な爬虫類との比較検討が不十分であった可能性があります。この歯の持ち主はどのような生物であったのか。いずれにしても、今後の研究の成果が期待されます。



海生爬虫類の歯の化石(発見地は留萌振興局管内の小平町。白色の数字は収蔵番号)



## 博物館事業紹介

## 北海道開拓の村 建物の大規模改修工事について

鈴木 明世

研究部博物館研究グループ 研究職員

北海道開拓の村の歴史的建造物や展示を維持していくことは、当館の重要な業務の一つになります。前号(『森のちゃれんがニュース2020秋号』)でも報告しましたが、令和元年度には旧武井商店酒造部と旧三<sup>ます</sup>河本そば屋の大規模改修工事と内部展示の更新を行いました。前回は、展示についてお伝えしたので、今回は、建物の補修についてご紹介します。

そもそも、開拓の村に52棟ある歴史的建造物の多くが、別の場所に建てられていたものを移築してきたものです。元の場所で建てられてから100年以上、開拓の村に移築してから40年近く経つ建物が多く、そうした建物を維持し続けることは容易なことではありません。例えば、経年による劣化が蓄積し、開拓の村の職員(北海道歴史文化財団)や当館職員の日常的な検査によって日々新しい損傷部分が見つかる状況です。そうした小さな損傷は、建物の維持や来村者への影響等を鑑みて、優先順位をつけて修繕しています。このような小規模修繕では健全な状態を保てない建物もでてきており、平成29年度から令和元年度にかけて、建物の傷んだ部分すべてを大規模に改修する工事を、毎年2棟、計6棟実施してきました。

令和元年度に行った前述の2棟は、主に屋根、外壁、漆喰壁などの補修に

加え、部分的に構造の補強を行いました。開拓の村にあるような木造の文化財建造物は、傷んだ部分のみを交換することで、できるだけ古い部材を残すことを心がけて補修をしています。ただ、そうした補修の仕方は文化財だから行っている、というだけではありません。傷みがほかの部分にまで影響しないように、建物を長持ちさせる補修として古くから一般的なものだったのです。今回を含め、過去の改修工事の様子は、開拓の村のホームページに詳しく掲載されています。ぜひご覧ください。

さて、この工事では、新しい試みとして、職人の技術を来村者に見ていただけるように、屋根葺きとその板材制作の見学会を行いました。明治~大正期の頃、北海道の住宅の屋根は<sup>まさぶ</sup>葺き屋根という屋根が主流でしたが、開拓の村ではそれと似た技術の<sup>こけらぶ</sup>柿葺きの屋根を採用しています。今の時代ではほとんど見ることでできない屋根葺きや板材制作の様子を、職人さんの解説付きで見学できる大変貴重な機会になりました。印象に残っているのは、板を手作業で割っていく現場を見て驚くお客さんだけでなく、「友達のお父さんがこれをやっていて、懐かしい! そうそう、こんな感じだったなあ」と懐かしむお客さんもいたことです。それだけ当たり前の技術だったのです。歴

史的に価値のある建物を長く残していくことも重要ですが、それだけではなく、建物にまつわる技術を見せる重要性も実感しました。

この先も小さなものから大きなものまで、補修工事は続いていきます。どの部分をどんな風に直したのか、そうした視点でも見学を楽しんでいただければ幸いです。

## 北海道開拓の村ホームページ

<http://www.kaitaku.or.jp>

北海道開拓の村の展示建造物等の補修・改修工事



旧武井商店酒造部を裏手から見た工事前(上)と完了直後(下)

明るくなった部分が部材を取り換えた部分です。柱や窓枠、外壁の上部は以前のままになります。屋根や建物全体については、ぜひその目でご確認ください!



見学会における屋根葺き(左)と板材制作(右)の様子

見学会は、開拓の村だけでなく全国の柿葺き屋根の補修を手掛けている、岡山県の株式会社児島工務店にご協力いただきました。

## 研究活動紹介

リンゴ農家の農具の収集と展示、その後  
—「掛け袋(左袋)」を探して—

山 際 秀 紀

研究部生活文化研究グループ 学芸主査



1966年札幌市生まれ。大谷大学大学院修士課程修了。1996年北海道産業史(農業)担当として採用。写真は、収蔵庫のリンゴ農具関係収納棚と余市のリンゴ収穫袋と私。

## 博物館の農具は大切なのか？

博物館資料はすべて、北海道の文化や自然などを伝えるため、過去・現在・未来の道民から預かっている貴重な財産です。それなら何故「農具は大切なのか」と問うかと言えば、博物館施設の収蔵庫で農具はやや雑に扱われることが多いからです。

また、以前から展示場の農業関係展示を見て、アイヌと移住者の対立という見方をする方をしばしば見かけました。しかし、明治以降のアイヌ民族の人達は、農林漁業など移住者と同様の道具で同様の仕事をしていたのです。

北海道の農具は、産(製造者)、学(札幌農学校等)、官(官園・試験場等)、民(移住者と先住民)が総合的に関わった道具として、急速に進歩・発達したもののなのです。

収蔵庫には、使用痕(持ち主による使用・改良・工夫・補修などの痕)や

紀年銘(製造者名・考案・改良などの文字情報)、地域差(土壌・使用者の出身地・新しい農具の影響)による違いの見られる似て非なる農具が多数保管されています。

「同じようでも同じものがない」とはいえ、資料群として優先的に補完したい資料群もあります。その一つとして、資料の種類が少ないリンゴ関係の農具がありました。

## 新たな農具を収集しよう

当館では、新しい資料を収集する場合、資料審査会が開かれます。最近では月一回に定例化されていて、館長以下管理職に、資料の価値と意義、展示など活用予定・収蔵場所及び収集と受入作業時間の確保等を説明し、承認後に収集することになっています。

2017(平成29)年に札幌市南区で収集した農具は、四季折々のリンゴ園の

農具が揃っていました。「掛け袋」を止める「止め金」の束や手首につける「止め金入れ」など、これまで欠けていた資料が、箱や洗面器のホコリや雑物の中から出てきた時は感激しました。掛け袋(百枚一束)や止め金(千本一束)は、ばらしてクリーニングした後、元通りにして、企画テーマ展「りんご農家の道具」で公開しました。

## りんごの「掛け袋」を調べてみた

掛け袋は、シンクイムシなど害虫から柔らかい実を守るため、リンゴの実に掛ける紙製の袋です。

1904(明治37)年に相沢元治郎(北海道庁農事巡回教師)が東北地方を視察して、翌年、余市町(黒川町・山田町・沢町)でロール紙を針金で止める四角袋の試験が開始されました。

やがて、安価な新聞紙を使った袋に変わっていきましたが、人手がかかる袋掛けには、作業に慣れた東北地方などからの季節労働者を雇うことが多かったといえます。

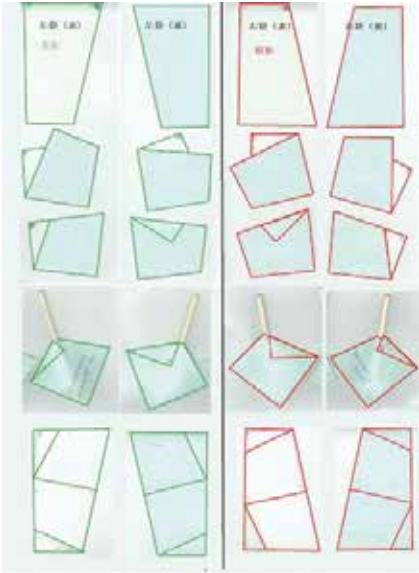
大正時代には、大江村(現在の仁木町)の下山道(後に余市町に合併、現在の余市町豊丘町)の笹井安太郎が三角袋(後に左袋と呼ばれる)を考案しました。三角袋は後に、高山吉五郎(余市町山田町)が右袋に改良します。

展示会準備にあたり、樹齢百年以上というリンゴを撮影するために余市町の吉田観光果樹園を訪れ、そこで余市・



四角の「掛け袋」を止める「止め金」(左:調査時撮影、中:収集後撮影)と手首につける「止め金入れ」(右)





折り紙で左袋と右袋を折ってみた



掛け袋（右袋＝赤、左袋＝緑）



余市果樹園の「左袋」(昭和39年の新聞)

仁木地方に特徴的な三角袋（右袋）と口を止める糊を入れる缶が残っていたのでご寄贈いただき、それらも前述の展示会で展示しました。

### 「三角袋」の左袋がほしい！

三角袋の折り方を探して、1922(大正11)年の『北海道農事試験場報告』と1936(昭和11)年の『リンゴ栽培の実際』の図を調べていると、2種類の折り方が違う説明を見つけて、これが『余市農業発達史』にある左袋と右袋かと思い、裏表の色が違う折り紙で折ってみました。そして、実物の左袋を何とか入手できないかと思いました。

そこで、左袋の発祥地である下山道(余市町豊丘町)に行ってみることにしたのです。困ったときの神頼みではないのですが、下山道神社にお参りをして、最初のお宅でリンゴの掛け袋について尋ねてみました。すると、ある



大正5年「宮本辰蔵」奉納の鳥居(下山道神社)

リンゴ農家を教えてくれました。その農家で聞き取り調査をして、更に親戚の家を紹介してくれました。

そこには、戦後、日本で最初に農業研修生としてアメリカに農林省の推薦を受けて派遣された宮本晋司(鳥居を奉納した辰蔵の孫)の妹さんご夫妻が暮らしていました。ご夫妻によると、晋司は1954(昭和29)年に帰国したとき、アメリカのリンゴ収穫袋を持ち帰り、複製を作りました。そして、余市地方では特有の収穫袋が広がりました。

更に、宮本晋司は翌年、日本にまだ

なかったスピードスプレイヤー(SSと略す)をフォードソントラクターと共に私財をなげうち輸入しました。宮本家は借金生活が続いたそうです。輸入手続きのため、宮本農場は北大農学部嘱託実験農場の指定を受けました。

ところで、掛け袋の左袋は、北大北方生物フィールド科学センター余市果樹園に他の農具と共に残されていました。そこには、リンゴの神様と言われた島善鄰先生と星野勇三先生の頌徳碑が建てられています。

余談ですが、その日本最初のSS(ジョン・ビーン社製)は、埼玉の農研機構農業技術革新工学研究センターに保管されていることが判明しました。

日本中の果樹園にポンプで薬剤を加圧して、扇状に高速散布することができるようSSが普及したことにより、手間のかかる袋掛けは併用されなくなり、無袋栽培へ移行したといえます。



星野先生 島先生 頌徳碑(昭和40年建立)



日本初のSS(革新工学研究センター)

## はっけん広場 冬の活動報告

# お持ち帰りキット「きょうりゅう FAN FUN FAN」

今年度の夏、新型コロナウイルス感染拡大の影響で第6回特別展「恐竜展2020」が中止となり、はっけん広場での体験関連イベント「きょうりゅう FAN FUN FAN」(恐竜好きの楽しい扇子)の開催も難しくなりました。それでも楽しみにしていたお客様に少しでも恐竜の雰囲気を感じてもらおうと、正面玄関に「恐竜扇子キット」を設置し、お家で簡単に「恐竜の扇子作り」を体験してもらえる、お持ち帰りイベントとして開催しました。



「キット」の種類は4つ、恐竜ファンではなくてもご存じの「ティラノサウルス」と「トリケラトプス」、翼竜「プテラノドン」、そして北海道むかわ町穂別で発見された「カムイサウルス(むかわ竜)」。

厚紙に描かれた恐竜に自由に好きな色を塗ってもらい、切り抜いてストローのハドメをつけてできあがり。自由に持ち帰れるようにして、一人一種類ずつとさせていただきますが、「どの恐竜にするか選べない」「家族で一セットずつもらおう!」また「孫

のお土産にする」と年齢や性別を問わず皆さん嬉しそうに手に取る光景がみられました。

今までとは違う状況での新しい試みで、試行錯誤し悩むこともありましたが、お客様の喜ぶ顔を見て、お家で楽しんでいただけたのでは…と思うと本当に企画して良かったと思います。これからも来館者の方々に興味をお持ちいただけるイベントを沢山発信していきます。

(解説員 折館里佳)



## アイヌ民族文化研究センターだより

# アイヌ文化巡回展「アイヌ語地名と木田金次郎」を開催しました

当館が毎年道内各地で開催している「アイヌ文化巡回展」。今年度は、7月3日(金)から岩内町木田金次郎美術館の特別展示「アイヌ語地名と木田金次郎」として開催し、去る11月3日(火・祝)無事に展示会の全日程を終了しました。

今回の巡回展は、真夏の7月初めから初雪の便りも聞かれた11月初めまでに及んだので、期間中に様々な催しや事業に取り組むことができました。

先ず、展示会のテーマに直接関わる講座・講演会として、岩内町にて7月11日(土)に「山田秀三の地名調査について」(講師:当館・小川正人)、18日(土)に「木田金次郎が見たアイヌ語地名」(講師:当館非常勤研究職員・佐々木利和)を開催、さらに8月8日(土)にはアイヌ語の入門講座として「アイヌ語 はじめの一步」(講師:当館・遠藤志保)をそれぞれ開催しました。

また木田金次郎美術館では、9月12日

(土)に「アイヌ語地名探訪バスツアー」を開催、泊村や神恵内村を巡る企画を実施しています。

このほか、7月18日の講演会がきっかけとなって、ここで話題にのぼった泊村の「モイワ」を海から見る、という企画が、岩内の皆様のご厚意で8月1日(土)に実現。漁船を出していただいで実際に海上から土地の様子をじっくり見る機会に恵まれました。

10月17日(土)には、当館の調査研究の成果を地元で伝える意味も込めて、



写真1 「木田金次郎 春のモイワ 1961年」

木田金次郎美術館との共催で町民講座「岩宇地域のアイヌ文化誌」(講師:当館・大坂拓、コメンテーター:北海道大学・谷本晃久氏)を開催しています。

それぞれの企画には、ほぼ定員いっぱい参加をいただくことができました。ご参加いただいた皆様をはじめ、感染症感染防止に絶えず気を配りながら運営を支えてくださった、木田金次郎美術館をはじめ関係の皆様、改めて感謝申し上げます。

(アイヌ民族文化研究センター長 小川正人)



写真2 海上から「モイワ」付近を見る  
(2020年8月1日)



# 2020年度博物館実習について

大谷 洋一

学芸部社会貢献グループ 研究職員

本年度の博物館実習は、14名の実習生を受け入れて8月18日から28日までの10日間で実施しました。今回は特に新型コロナウイルス感染防止に気を配りました。例年の会場は会議室で、二つの班（平均で一班8名）に分かれて行いましたが、今年はより広い講堂において一班5名以内に絞ったABCの三班に編成しました。安全な距離を保ちつつ、毎朝の検温やマスク着用などのほか、毎日、帰りには着席した椅子や机など、使用した箇所のアルコール消毒なども実習生自身が行うように指示しました。

実習の前半は、多様な分野を経験させるため、五つの研究グループ（生活文化研究、歴史研究、博物館研究、自然研究、アイヌ文化研究）が日替わりで実習を担当。後半は各研究グループの実習で学んだ成果を活かした、班ごとの展示制作実習を実施。ここ数年は、

この後半の展示制作が完成前に時間切れとなる班が続いたこともあり、今年度は、実習生自らが制作する展示についての強い意識付けをするためのプログラムを組みました。

初日は、博物館の概略的説明や自己紹介、その後は「多様化する社会における博物館の価値」、新たに加えた「当館における特別展示について」の講義のほか、収蔵庫や「北海道開拓の村」の野外展示の見学。そして各研究グループの担当する日には、そのグループが総合展示で制作した展示の見せ方や工夫などを朝一番にレクチャーする機会を新たに設けたのです。これは大きな改善点となり、すべての班が例年よりも半日以上の時間短縮で展示を完成させました。

A班は、2019年に野幌森林公園内に出没したヒグマに着目し、「ヒグマとサケと、それから私。」というテーマで、食

べ物をめぐってヒグマと人間が接触する機会を展示して双方の共生について観る人が考えるきっかけを与えるものでした。B班は、「昔のカメラ～見る・比べる・知る～」というテーマで、カメラの性能がどのように進歩してきたのかを一見して理解できる「カメラ年表」をメインに、各種カメラについての写真とその一口解説を書き加えました。C班は、「個性ゆたかなくずし字」というテーマを掲げ、「五」「え」「御」の三つの文字を取り上げ、同じ文字でも様々な形のくずし字があることを、起承転結のストーリー性を持たせて読み進めさせる工夫をしていました。全班が、より関心を持った人が持ち帰るワークシートを用意した点も良いサービスでした。

短い実習期間ですが、日々成長する学生たちの姿を見るのは私たちスタッフのやりがいです。



写真1 広い講堂内での実習風景



写真2 アイヌ民族衣装のたたみ方を習う実習生



写真3 机をアルコール消毒する実習生



写真4 実習生による三つの展示（総合展示室2階で2週間公開）



写真5 くずし字について展示制作をしたC班メンバー4名

## 活動ダイアリー

## 2020年9月～2020年11月の記録

※■は展示活動、■は教育普及活動、■はその他の博物館活動です。

9月6日(日)

■ミュージアムカレッジ「択捉島紗那の学校と高城重吉」を開催。担当：小川正人。

9月13日(日)

■子どもワークショップ「始祖鳥カイトを飛ばそう」を開催。担当：表溪太・圓谷昂史。



9月19日(土)

■ちゃれんが古文書クラブ④を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。

9月26日(土)

■自然観察会「木の実・草の実の大ぼうけんをたどろう」を開催。担当：水島未記・堀繁久・表溪太・自然ふれあい交流館スタッフ。



9月29日(火)

■森のちゃれんがニュース2020秋号(Vol. 21)を刊行。

9月30日(水)

■はっけんイベント「きょうりゅう FAN FUN FAN (恐竜好きの楽しい扇子)」の配布終了。配布数864セット。

10月1日(木)

■はっけんイベント「羊毛でスイーツマグネットをつくろう」を配付。11月29日(日)まで。配布数534セット。



10月11日(日)

■子どもワークショップ「糸電話で、もしもしコンニチハ」を開催。担当：会田理人。



10月14日(水)

■館内定例研究報告会を開催。発表者：渋谷美月。

10月16日(金)

■総合展示室クロズアップ展示①～②を展示入替。

①近世文書を読む「④村山家文書」



②旧松前藩士南條家資料



■令和2年度北海道立総合博物館協議会を開催。

10月17日(土)

■ちゃれんが古文書クラブ⑤を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。

10月18日(日)

■ミュージアムカレッジ「島にキツネを放つ」を開催。担当：山田伸一。

10月24日(土)

■はじめての古文書講座①を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。

10月25日(日)

■子どもワークショップ「たのしいな♪ アイヌ音楽 うたおう・おどろう」を開催。講師：スルク&amp;トノト。



10月28日(水)

■館内定例研究報告会を開催。発表者：山田伸一。

11月3日(火・祝)

■ミュージアムコンサート「アイヌ音楽ライブ」を開催。演者：MAREWREW (マレウレウ)。

11月4日(水)

■はまなす幼稚園が開園30周年を記念して来館。



11月7日(土)

■はじめての古文書講座②を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。



11月21日(土)

■はじめての古文書講座③を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。

11月29日(日)

■ミュージアムカレッジ「建物を通してみる、サハリンに残る「樺太」」を開催。担当：鈴木明世。

## 来館者数

○2020年9月～2020年11月

総合展示室 21,633人 特別展示室 0人 はっけん広場 0人

○累計(2015年4月～2020年11月)

総合展示室 550,020人 特別展示室 388,040人 はっけん広場 120,784人

## 森のちゃれんがニュース 第22号

発行日：2020年12月31日

編集・発行：北海道博物館

〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2

Tel. (011) 898-0456 Fax. (011) 898-2657

ウェブサイト <http://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp>

©Hokkaido Museum, 2020